
目指せ！甲子園!!……なんて言ってみただけ

笑えばいいと思うよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指せ！甲子園！！……なんて言ってみただけ

【Nコード】

N3511W

【作者名】

笑えばいいと思うよ

【あらすじ】

野球にあまり興味がない
主人公が親友に巻き込ま
れて野球部に入部して、

甲子園を目指す話。

作者は野球の知識が全然ありません。変なところがあると思います。

プロローグ（前書き）

つまらないと思いますが

プロローグ

どーも、俺は、柊 朔 と申します。中学3年生です。一応野球部です。もうすぐで、高校生になります。

突然ですが、俺には、二人の親友がいます。

えっ？普通だって？そう、ただの親友二人だったら良かったんだけど

ど、あいつら全然普通じゃあないんだよね、一人目は、齋藤 慶太郎。野球部のエースで今年、全中を制覇した時の立役者で、超イケメンでなおかつ勉強も出来て性格良く、モテない筈がない。噂では、学校にファンクラブが在ったらしい、

二人目は、駿河 翔。コイツも野球部でキャッチャーで4番を打っていて、今年、全中を制覇した時の立役者である。

というか、ハッキリと言ってしまえばこの2人で優勝した様なものだ。

そして、慶太郎に負け劣らずの超イケメンでしかし、違う所は、勉強は苦手。とはいっても、学年では、中の上である。やはり、ファンクラブは存在していた。

どう？ 凄いでしょ？ そんな凄い2人が何故か俺を野球部に入れ

たがるんだよ！ 俺は、野球よりサッカーの方が良かったんだよ！！

サッカー部に入部届けを出したはずなのに、いつの間にか野球部に入部した事になっていて、俺が出した入部届けが却下されたし……ハァ、でもまだこれはいい、小学生の時も有ったから。

しかし、これだけは慣れない、女子達からの死線。これだけならま

だ大丈夫なんだけど（大丈夫ではないが）、男子達からの死線もある。何故男子達からもっと思ったよね？それは、また今度話すとして…

今は、高校進学について考えてなきゃならない。俺も一応全中制覇した時にレギュラーとして試合に出ていたから、名門の学校から推薦をもらっていたりする。あの2人は、全国の超名門学校から推薦が一杯きている。前、聞いたら神奈川県和学校に行くとか言っていたから多分行くんだろう。お前もここにしない？的な事を言われたから、丁寧にお断りした。そしたら、じゃあどの高校にするのか？とずっと聞いてきたが、答えを濁し続けて、俺は、普通の公立高校に受験した。

あの2人には、解放されるぜ！！これで普通の学生生活が送れる。

プロローグ（後書き）

すいません m () m。全然野球の話出てきませんでした。

第一話

俺は、笹崎高校という公立高校に入学をした。ここは、スポーツが凄いつて訳ではなく、良くて2回戦まで、という部活がほとんどで特に取り柄のないドコにでも在りそうな学校だ。



自分のクラスのドアの前に立つ。

これからは、あの2人が居ないから平凡な学校生活がやっと送れる。そういえば、アイツは、高校どこに行ったんだろう？ まっ、俺が行く学校は、教えてないから、まず被る事はないだろう。これで男子達からの死線を受けることがなくなるから、嬉しいね〜

とりあえずこれで、やっと平凡な学校生活が送れる！！

ガラガラガラ

教室のドアを開けた。



そんな風に考えた時期も俺にはありませんでした。

駿河「おっ、やっと来たか」

？「何で、受験する高校教えてくれなかったの？探すの大変だったんだよ！！朔ちゃんのお母さんに聞くまで分からなかったんだから。」

見馴れた顔が2つあった。1つは、ザッ、高校野球児みたいな髪型をしていて長身でがっしりとした体格の持ち主の駿河 翔。

もう1つは、茶髪でツインテールの髪型をしていて美少女で中学の時に芸能界のスカウトの人に何回も勧誘される程でモデルみたいなスタイルの持ち主の水嶋 海。

……………そう、中学時代に男子達からの死線を受けていた原因は、もちろんコイツだ。悲しいことにコイツとの関係は、親同士が仲が良くて、小さい頃からよく遊んでいた。いわゆる、"幼なじみ"というやつだ。そのおかけで野球に……………その話はまた今度機会があれば、話すとしてちょっと待てよ、今何て言った？母親に聞いた？ふ、ふざけるなよ！！教えるなど何度も頼んだのに！！！！

まあ、いつか過ぎた事は仕方ない。今は

柊「…………聞きたい事は一杯有るけど、今度聞くとして、慶太郎は？」

慶太郎だけが見当たらない

駿河「慶太郎？あゝ、アイツも誘ったんだけど、高校では、お前と勝負がしたいってさ、だから違う学校に行くんだってよ。」

柊「ハア~~~~お前じゃあなくて、俺!？」

めっちゃくちや驚いた、何故に俺？

駿河「そんなに驚くことか？お前だって中学時代3番打っていただろ？アイツは、俺よりも、お前の方をライバル視していたし」

おいおい?……

第一話（後書き）

野球の話しがまだ出てこない？

第2話

それから、数日がたった。新入生の部活勧誘が始まっていた、中でも野球部は、異常に盛り上がっていた。それは、全中を制覇した中学校で4番を打っていた、翔が入部したからだ。それだけなら盛り上がるだけなのだが、水嶋がマネージャーとして入ったからだ。入学して間もないのに、30人以上の人から告白を受けて全て断って、しかも、ファンクラブみたいなものが出来ていた。あれは、ファンクラブというより一種の宗教団体ばい。ちなみに翔にも同じようなものが出来ている

そんなに二人が入ったのだから部員が増えると思いきや少なかった。何故だと思う？

それは、翔と水嶋が付き合ってるという噂があるからだ！では何でそんな噂が流れたか、それは、俺が流したから！

いやあ、あの二人と一緒にいると、男女共に紹介しろ五月蠅いから、どうせなら、付き合ってることにしたんだ、そうしたら まあ、

何と不思議みんなあつさりと退いてくれるんだよ。そんな訳で学校公認の美男美女カップルってことになってる。本人達の意味は無視だけど。



俺は今入部届けを持って職員室の前にいる。これを担任の先生に出せば、悲願のサッカー部に入部出来る。

担任の先生が目の前を通った。

柊「あつ、先生！入部届けを持ってきました。」



放課後になり、野球部はグラウンドに集まって軽く自己紹介をして、自分がやりたいポジションの所に行った。

さて、どうするか？

駿河「朔は、どのポジションにする？」

迷っていると、翔が話しかけてきた。

柊「迷ってるんだよね、ぶっちゃけ、どこでもいいんだよね。翔は、キャッチャーだろ？」

駿河「まあ、そうだな、慣れてるポジションだしな。」

水嶋「じゃあ、ピッチャーやってみたら、小学生の時はやってたよね？」

翔と話してたら、後ろから声をかけられた。

ピッチャーか、懐かしいなあでも

柊「ヤダよ、何であんなに疲れるポジションをやらなきゃいけないだよ。」

駿河「確かに、朔の球を受けてみたいな
朔がピッチャー………面白いかも」

翔までも便乗してきた。

水嶋「だよねー中学生の時だって、朔ちゃんだけが色々なポジションをしていたじゃん。」

そう何故か俺だけが、色々なポジションをしていたでもスタメンとして試合には出ていた。

駿河「あゝそれは、朔がどのポジションでも完璧にこなすから、監督と話して固定のポジションを決めなかったんだよ。」

おいおい、凄く評価されてるし、つかめっちゃトンネルとかしてたし試合中に…

柊「とりあえず外野にするわ。」

水嶋は不満そうな顔をしていたが気にしない。



内野ノックから始まった。俺は、ふとショートを守っている奴のプレーを見ていた。

（あのプレーどこかで………!!もしかして、でも何でここに?）

第3話

練習が終わり、先程の練習でショートを守っていた奴に話しかけた。

柊「間違ってたら、ごめん。

もしかして富中学の宮崎？」

？「そうだけど、君は？……って、柊 朔！？何で君が、ここに！？」

どうやら、当たってたようだ。なんか知らないけど、名前覚えられてるし、しかも、フルネームで翔なら、わかるけど………軽く自己紹介をしていたから当たり前か、

いやあれば、先輩達の自己紹介であって俺達の自己紹介ではなかった。つーか普通は新入生がするものだろ。なんかズレいるんだよね、この学校は。

柊「ん？何で俺のこと知ってるの？それと、俺はお前達みたいに野球、上手くないから、素直に家から近い学校選んだんだよ。逆にお前が何でここに？」

宮崎「知らない方が少ないだろ…君たちの中学で、齋藤慶太郎、

駿河翔が特に有名だけど、君だって有名だよ、なんたって3番を打っていたし。それと何で僕が、この学校を選んだのかだね、君と同じ理由さ家から近いからね。

しかし、君と同じ学校になるなんてね：一緒にプレーしてみたいと思っていたけど叶うとは、思わなかったよ。」

柊「俺と一緒に！？翔とかとじゃあなくて？まあ俺としては、宮崎みたいに走力があってミートが巧みなおかつ守備力がある万能君がチームメイトにしていると心強いから、嬉しいよ」

宮崎「そんな、褒めすぎだよ。」

宮崎は、照れていた

駿河「お～～い、朔～～」

遠くから翔が大声で俺の名前を呼びながらやって来た。

柊「なんだよ、大きな声で呼ぶなよ五月蠅いから」

宮崎「五月蠅いって、ちょっと」

と苦笑いしていた。

駿河「悪い、ってそんなことより、やっぱり投手やれよ、朔！」

翔が来ていきなりわからん事をほざいた。

柊「投手う？さっき、やらないと言ったよな。」

宮崎「投手？柊君はやったことあるの？」

柊「朔でいいよ、
小学生の時にちょっと、それからやってない。だからほとんどやってない。」

宮崎「じゃあ僕も賢介でいいよ」

駿河「あれ？もしかして宮崎？」

翔は今思い出した様に宮崎に聞いていた。つーかはじめてからいた
だろ？

宮崎「そうだよ。そういう君は、駿河君だよ、君もこの学校なんだ」

駿河「まーな、朔と一緒に野球がやりたくてな。それと、翔でいいぞ、その代わりに賢介と呼ぶから」

駿河「…っとそうだった！それがな、今投手が4人なんだけど、その内3人が3年生、2年生が1人でさ、1年生が1人もいないんだよ。だから、夏が終わったら1人になるんだよ。」

それは、大変だな。

柊「でも、今年の夏は大丈夫なんだろう？」

駿河「それは、大丈夫だけど……」

柊「そんなに考えんなよ。秋の大会までに、1人位投手希望が出てくるって、もし出てこなかったら、仕方ないから俺がやるよ。その時は、ちゃんと指導しろよ！」

駿河「まさしろ!!」

そのあと、マネージャーの仕事を終えた水嶋も加えて4人で帰った。



そして、数日が過ぎて、組み合わせが決まった。俺達の学校は、去年は2回戦で敗退したので一回戦からの登場になった。ここまでは、良かったんだが、二回戦の相手が第一シードで去年、甲子園でベスト8、今年の選抜でベスト4に入った、西倉高校になってしまった。

話しは、変わってベンチ入りメンバーに、翔、賢介、俺が無事に入る事が出来た。翔に至っては、4番を任せられている。賢介は1番、俺は2、3番を任された。1年生では、俺達だけがベンチ入りメンバーそしてスタメンになった。

設定（前書き）

地域は、宮城県にしたいと思います。

作者が宮城県出身なので

設定

名前……………柊 朔

容姿……………中の中、とても普通な顔立ち、どちらかと言えば格好いい分類に入る。けどやはり、普通。

投／打……………右投げ右打ち

中学時代に3番を打っていたり、野球センスは抜群で長打力は翔には、劣るがそれ以外は上回っている。だが本人は、下手だと思っている。幼なじみの水嶋海に対しては、今のところ好意を抱いてはいないそれは、中学の時に男子達からの視線もとい死線を受けたり、変な因縁をつけられたりと散々だったのが原因。わりと情報通

名前……………駿河 翔

容姿………上の上、整った顔で、ファンクラブが出来る程。

投／打………右投げ左打ち

中学時代に全中制覇したメンバーで4番を打っていた。県内外の名門学校から推薦がきていたが、全てを断り、朔と同じ学校を選んだ。密かに朔をライバルと思っている。水嶋海と付き合っていることになってる。本人達は知らないが

名前………宮崎 賢介

容姿………上の下、翔程ではないが、イケメンで隠れファンがいるとか、実は付き合ってる人がいるらしい。そんなに目が悪い訳ではないが普段、メガネをかけている

投／打………右投げ左打ち

中学時代、朔達と対戦して県大会では、唯一苦しめた。俊足巧打ですでに高校トップレベル。試合の時はメガネを外す。

名前……………水嶋 海

容姿………上の上、芸能スカウトに何回も勧誘される程の美貌の持ち主、綺麗な黒髪でツインテール、くりっとした瞳、綺麗な肌………などなど

朔とは、幼なじみで、入学して間もないのに学校のアイドルになった。翔と付き合ってることになってる、本人達は知らないが、野球部のマネージャーになったがあまり仕事をさせてもらえない、控えの選手が「水嶋さんを、働かせるなんて……」的なことで、マネージャーの仕事をしてしまう。なので、マスコットアイドルになっている。朔に好意を抱いているが……

設定（後書き）

今のところは、こんな感じです

変わる可能性があると思います

第4話

県大会の初戦は、11対3の7回コールドで勝った。翔が、1本塁打を含む3安打6打点の活躍だった。

そして、次の試合は早くも優勝候補の西倉高校との対戦になった。2年生ながらもプロが注目している投手、及川 廣政。左投げでキレのある変化球にMAX149Kmの直球を武器に三振をとる。打者としても、注目されていて4番を打っている。高校通算39本の本塁打を打っている。投打ともにチームの柱になっている。



「これから、西倉高校戦のスタメンを発表する」

監督がスタメンを読み上げる

「1番、ショート、宮崎

2番、レフト、松

3番、ライト、柊

4番、キャッチャー、駿河

5番、ファースト、三木

6番、サード、中瀬

7番、セカンド、町田

8番、ピッチャー、原田

9番、センター、矢野上

以上このメンバーでいく。」

「相手は、強い。練習試合も組んでももらえない程に……………最後に一言、楽しんでこい!!」



礼！！

アップを済ませて、整列をし試合が始まった。俺達は先行で相手エース及川の投球を見ていた。

柊「翔、なんとかなりそうか？」

駿河「わかんねえ、実際に打席にいかないと……それより、先輩がどれだけ抑えるか、だな。」

そうなんだよ、先輩がどれだけ抑えるかにかかってるんだよ。何点取れる相手では、ないし何とか3点以内に抑えてくれれば…

プレーボール！

宮崎は、左打席にたった。

宮崎（何とかして出塁して、朔くん、翔くん、に繋げれば）

バットを短くもった、投手が振りかぶって第1球を投げた。

ビュッ、キン

ファール

初球から145？のストレートを積極的に振っていったが、ファールになった。

宮崎（は、速い！予想以上に手元でノビてくる！？）

ビュッ バシッ

ストライク

ストレートがアウトコース低め一杯に決まった。

ビュッ クイツ バシッ

ストライク、バッターアウト！

左打者にとっては、外に逃げるスライダーを振り、3球三振をした。

柊「どうだった？」

及川の球筋を聞いてみた。

宮崎「思ったよりも、手元でノビてくるよ、変化球のときも同じ腕の振りだから、打つの難しいかも」

キン

バシッ

アウト！

2番バッターが、初球を振り、キャッチャーフライでアウトになった。

終（まっ、まだ初回だし、それに翔なら、何とかするだろう）

特に何も考えないで右打席についた

ビュッ

バシッ

ボール

1球目は、ストレートが高めに外れた。

終（確かに、手元でノビてくるな）

ビュッ

バシッ

ストライク

今度は、アウトコースにカーブが決まりこれで、1ボール1ストライクになった

ビュッ

終（おっ、甘い！）

甘く入ったインコースのスライダーを引っ張り気味に打った

カキーン

快音を残しボールは、レフトポール際の飛んだ。

ファール

ボールは僅かにそれてファールになった。

柁（ちっ、引っ張りすぎたし）

右手で軽くヘルメットを叩いた。

ビュッ

バシッ

ボール

インコース低め投げたストレートは、僅かに低めに外れた。カウ
ントは、2ボール、2ストライクになった

ビュッ

バシッ

ボール

真ん中低めから落としてきた。振りそうになったが、何とかとめ

た。

終（あぶねえ〜フォークがあるなんて、聞いてねえよ!!）

ビュッ

キーン

投手の頭を越えてセンター前にヒットを打った。

そして、次の打者の翔は、左打席についた。

駿河（まずは球筋を確かめないと）

ビュッ

バシンッ

ストライク

アウトコースに148?の直球が決まった。

駿河（はっや、）

ヒュッ

ボールは1球目と同じアウトコースの所にいった。

駿河（2球同じコースだど！？なめるな！）

フルスイングで振った

クイツ

バシッ

しかし、ボールは大きく外に曲がりバットに当たるとは、なかった。

ストライク

駿河（なっ！？スライダーあんなに曲がるのかよ！？）

投手は3球目を投げた。

ビュッ

バシッ

ボール

高めの釣り球がきたが、振らなかった。

次はアウトコース低めに投げたが、僅かに低めに外れて、ボールになり、2ボール2ストライクになった。

駿河（外ばかりで、とめられると思うな！！）

投手が5球目を投げた瞬間におもいつき踏み込んだ。

ビュッ

駿河（なっ！？ここでインコースかよ！！）

バシッ

ストライクバッターアウト！
チェンジ！

おもいつきり踏み込んだ分、膝元にきた直球に対応出来ずに見逃し三振をした。



相手の先頭バッターが追い込んでから粘り四球で出塁して、2番バッターが初球でバントを決めて、ランナーを2塁に送った。続く3番バッターが綺麗にセンター前に弾き返して、1アウト、ランナーが3塁、1塁になり、4番を迎えた。

駿河（早くも正念場だな、どーすかな…よし！全球外で勝負だ！
最悪歩かせても）

初球を投げた。

駿河（げっ、真ん中に！！）

カキーン

打球は、ライトにいった犠牲フライには、十分なフライが上がった。3塁ランナーは、タッチアップに備えていた。

バシッ

ライトがフライとり、3塁ランナーがタッチアップをした。

駿河（刺せ、朔！！）

ライトからいい返球がきてバックホームされて、タッチプレイになった。

アウト!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3511w/>

目指せ！甲子園!!……なんて言ってみただけ

2011年10月9日15時56分発行